京都市学校歴史博物館だより Vol. 6

京都市学校歴史博物館
〒600-8044
京都市下京区御幸町通仏光寺下ル橋町437
TEL(075)344-1305/FAX(075)344-1327
ホームページ
http://www.gakurehaku-unet.ocn.ne.jp
発行日/平成15年3月

京都市学校歴史博物館は,京都の学校の歴史的意義を
学校ゆかりの歴史資料や美術工芸品で紹介する,
さまざまな展覧会を開催しています。

特別展 2月13日(木)～4月22日(火)

京都の学校ゆかりの画家 上村松園

京都に生まれ，京都で育ち，京都で創作を続けた画家「上村松園」。

彼女は，現在は学校歴史博物館として生まれ変わった元開智小学校へ通い，日本画の素養を身につけ，理解ある母の庇護のもと京都府画学校に進みました。そして，鈴木松年，幸野楳嶺，竹内栖鳳という錚々たる画家たちに師事し，日本を代表する画家へと大成していきました。

松園は京都の学校へ深い思い入れを示し，京都の学校には松園とのゆかりを物語る作品が伝えられています。それらの作品を中心に，松園の人間像と彼女の芸術を育んだ京都の町の息づかいに迫ります。

◆**主な展示品**（開催期間中に一部展示替えあり）

- ●上村松園遺品（刷毛立て，刷毛，眼鏡，硯，矢立，ものさし）
- ●松園の教科書（元 開智小学校当時）
- ●静　御　前（六曲一双の屏風に12枚の絵が貼りまぜられたうちの1枚）
- ●税所敦子孝養図（児童たちの教訓になるような絵を描いてほしいという依頼により制作された）
- ●舞　支　度（屏風二曲一隻・大正3年第8回文展出品作）
- ●夕　　暮（孫娘が通学していた京都府立第一高等女学校に寄贈された）
- ●四季美人図（米・農商務省からの名指しでシカゴ博の御用品にされた）

静御前

会期中に上村淳之氏と上田正昭館長の対談を開催します。

上村淳之氏

【記念対談】

『祖母松園を育んだ京都の学校と風土』

- ●上村淳之氏（日本画家 日本芸術院会員 京都市立芸術大副学長）
- 上田正昭（当館館長 京都大学名誉教授）
- ●日　　時　平成15年3月29日(土) 午後2時～4時
- ●場　　所　学校歴史博物館 講堂
- ●募集人員　250名　※参加料は無料　※電話申込

上田正昭館長

特別公開対談

「全国に先がけて京都に学校ができた背景」

昨年秋に開催した企画展「『京都の学校の礎を築いた人々』～全国に先がけて学校ができた背景～」に関連する事業として，11月30日（土）に当館館長　上田正昭と京都市立芸術大学学長 西島安則氏による特別公開対談を開催しました。この特別公開対談では，専門の分野はもとより，教育の分野においても第一人者である両氏により，全国に先がけて番組小学校が創設された背景を明らかにしながら，様々な視点から現在の教育に対する提言が出されました。

京都では，明治2年，幕末の戦乱や東京遷都などによって衰微した京都を，教育による人材育成によって再生しようと，日本で最初に市民が番組（町組）ごとに学校を創設し，かまど金（かまどを構えている全ての家が負担したお金）等によって，運営しました。当時の人々が「教育百年の計」に思いを馳せ，お金を出し合い，学校を作ったのは，既に，学校の必要性，知識の大切さなどを十分に認識していたからです。それは，江戸期から，市民の市民による学問の場を開設し，人の道をはじめ，豊かな教養と高い向学の気風をはぐくみ，優れた人材を育成してきたことに現れています。

『発想の転換と京都の風土』

上田　東京が都になり，京都を何とかしようと，色々な方策をしますが，その一つに教育をやろうと。ここがすごいなと，私は思っているのですが，西島先生も生粋の京都人ですが，どの様にお思いですか。

西島　京都の小学校には沢山の素晴らしい宝物があります。学校を卒業して芸術家になられ，学校に思い出のお礼として自分の作品を寄贈される気持ちは，京都が誇りにすべきことだと思うんです。もともと芸術とか芸事は，先生とお弟子さんの関係が単位でしたが，東京へ都が移った時に，京都の一流の絵描きさんが集まって京都府画学校をつくり，日本画も西洋画も文人画も南画も全部そこで教えました。これは大変な発想転換です。この様に画学校ができたことは，京都が文化の都であると再認識し，これからの京都に文化の都をつくろうとしたということです。権力の中心としての都という意味より，むしろ京都人の誇りは，本物の文化がここにあるということにある。それは京都にある伝統の力が象徴していると思います。

何か新しい時代に向かって，町全体でエネルギーが生まれるというのは，例えば風土というようなこと。それは「いざ何かやる」という時には出てくる，自信と誇りを持っているのではないかと私は思います。そして小学校ができた背景の中にも根深い文化の都という風土があるんじゃないかと思います。

上田　京都が学校に情熱を注いだのは画学校をつくる状況の中にもみられるというお話をして頂きましたが，確かに京都の近代化は風土が呼んでいる近代化という感じがしますね。

西島　私は今，風土という言葉で言いましたが，総合ー違うものを一緒にして新しいものをつくる，それが京都の文化だろうと思うんです。

『ルネサンスの生まれる風土』

西島　以前に石田梅岩の本を読んで，心に残った言葉があります。それは，「神と人が一体になる」という意味の言葉です。

ルネサンスという時期にイタリアで科学革命が起こりました。そして，コペルニクスが地動説と天動説という発想の転換をします。人が考えの転換をする時は，本当の意味で心が自由になった時，悟りを開いて全くの自由な発想をするようになった時です。イタリアの古い教会の壁には石田梅岩の本と同じことが書いてあります。人と神とが一体となったと。これがその後の近代化の始めをつくりました。だから，京都は，ルネサンスの生まれる風土を持っていると思うんです。小学校ができたのは，その一つの表われです。

上田　石田梅岩の学問には神道や仏教や儒学があって，まさに総合学問です。私がびっくりするのは，18世紀の段階で女性に学問を開放した点です。また「町人が金儲けをすることは少しも恥ずかしくない。元銭があったら商売が成り立つ。利益をとることはちっとも間違いではない。ただ，暴利を取ってはいけません。」ということを順々と言って，町人の道を説きました。京都が生んだ学問ですね。伊藤仁斎は，朱子学を手本に学問をします。

KYOTO

孔子・孟子の教えそのものに帰ろうというのが仁斎の姿勢でした。彼も町人に学問を開放します。これも京都だから学問が生まれた。やっぱり京都の学問は本物志向ですね。自然そのものを見るという本物志向の伝統が京都の学問にはあったと思います。残念ながら,そういう自覚が今の京都市民にはあまりないんじゃないでしょうか。

西島　私はあると思うんですよ。ただ,今の日本全体がそういうものを正しく評価できない状態にあります。だけど,日本が立ち直るためには,京都がしっかり立ち直らないといけないと思うんです。政治も行政も必ず「人のため」にあるわけですよね。その「人のため」とか「人の心」を一番大事にしたのが京都の文化だと思うんです。だから,「子どもの時に良い教育を受けたから今の成果は学校の後輩のために,あるいは学校のために寄贈しましょう」という気持ちが出てきているわけですね。それをこれからの時代にどの様に蘇らせるかということです。もう一度,「大人になってから宝物を学校に寄附」という時代を町の中でつくりたいと思いますね。

『未来に向かって』

西島　京都市で,15年程前に「大学のまち・京都」という言葉があり,それから10年程して,大学コンソーシアムをつくろうじゃないかと言い出した。大学人同士が「大学とは何のためにあるのか」と議論をして,京都のどの大学に入っても,京都中のどの大学の講義も聞けるというようにした。京都の町のために,それぞれの大学が一番魅力のある講義を持ち出して,市民のための学校をやろうと。立派な建物も京都駅の前にできて今は毎日満員です。今,中心になっているのは「京都学」で,京都の文学,芸術,歴史,将来の都市計画,色々な分野に渡っています。

上田　未来に向かっていかに学問を拡げてゆくか,深めてゆくかという大学コンソーシアムの構想をお話し頂きましたが,もう一度アジア人はアジアの展望を見直すべきであると思います。20世紀の政治や経済や文化をリードしたのは,ヨーロッパであり,アメリカです。私はアジア独自の輝きが世界的に評価されていないように思います。そういう意味では,アジアの文化,アジアの哲学,アジアの宗教を再発見して,自信を持つ必要があると思います。21世紀をアジアが担える世紀にしたいと思います。それは同時に,京都人が京都に自信を持つ。京都は新しいルネサンスへの風土があるわけですから,京都人自身が京都にもっと自信をもって,力強く前進する必要があるのではないかと思います。

来館者の声

当館では,平成14年8月8日(木)～10月15日まで企画展「昔の教科書大集合～教科書からみる時代の教育～」を開催しました。

教科書は,日本の教育の歴史を具体的に物語る貴重な資料です。

今から約130年前,開校したばかりの小学校では,まず先生用の教科書が作られました。子供たちが自分の教科書を持って授業を受けるようになったのは,明治時代も中頃を過ぎてからでした。やがて,文部省が作った教科書を,日本中のすべての子どもたちが使うことになります。また,第二次世界大戦後,教育制度が大きく変わり,戦時中の教科書に墨を塗る時代もありました。この企画展では,教科書が伝える様々な時代に思いをめぐらせ,これからの教育を考える機会となりました。来館された方の感想の主なものを紹介させて頂きます。

- ○教科書を見ながらお父さんが子どものころの話をしてくれた。(小学生)
- ○昔の国語の教科書が私にはよめなかった。(中学生)
- ○戦前の教科書を以前から実際に手に取って見てみたいと思っていたので,非常に貴重な体験ができたと思っています。市民学芸員の方,ご丁寧な案内ありがとうございました。(大学生)
- ○京都の学校教育の歴史を知るだけでなく,その背景にある社会情勢・風潮や人々の生活など,幅広く知ることができました。(20代女性)
- ○墨ぬり教科書が興味深かった。(30代男性)
- ○教科書の移り変わりがとても興味深くおもしろかったです。(30代女性)
- ○京都の小学校がどの様に出来ていったのか,初めて知りました。昔の人々の教育に対する気持ちに感動しました。自分の使った教科書はとても懐かしかったです。(40代女性)
- ○京都の教養・思想の深さを改めて知りました。京都に生まれ,育ち,そして教育を受けたことをうれしく思います。(40代女性)
- ○戦前と戦後教育の違いが教科書の移り変わりで実感できるようたくみな陳列の仕方に感動した。(50代女性)
- ○京都の歴史の深さにふれた思いがした。(60代男性)
- ○大東亜戦争が始まった時,国民学校の一年生でした。教科書の文書も絵も覚えていました。涙,涙でした。(60代女性)
- ○自分が習った教科書は特に興味深かった。(70代男性)

※常設展においても教科書展示のコーナーを設け,江戸時代末期以降の教科書を展示し,時代と教育の歴史の変遷を紹介しています。一部の教科書は実際に手にとって見て頂くことができます。

「ヨミカタ１」
第5期国定文部省
昭和16年

「しょうがく　こくご1/1」
日本書籍
昭和39年文部省検定済

明治期の就学奨励と夜学の開設

博物館主事　森山正昭

明治5(1872)年,『邑に不学の戸なく,家に不学の人なからしめんことを期す』と,国民皆学の精神をうたった「学制」が発布され,以来,明治政府の教育政策の重点は初等教育の形成におかれ,全国各地域に小学校を設立した。しかし,社会的・経済的な諸条件が伴わないこともあって,学齢児をすべて就学させることは極めて困難な実態であった。政府は就学の普及実現を図るため,就学督励に関する幾度かの文部省布達を出し,また教育令や小学校令の公布・改正をするなど,地方に対して強力な就学督促・勧奨を行った。明治6(1873)年の就学率はわずか28.13%(男子39.90,女子15.14)に過ぎず,特に女子の就学率が極めて低く,それが50%を越えるのは明治30(1897)年以降で,全国的に就学率が男女とも98%を越えるのは,明治40(1907)年以降になる。

京都は明治2(1869)年に,全国に先駆けて学区制のいわゆる64の番組小学校が創設されるなど,教育の先進地であり,いち早く児童の不就学対策にも取組み,例えば『就学奨励の達し』(明治7)・『不就学児の就学督励の告諭』(明治8)・『夜学課業表の告諭』(明治8)・『就学児童に就学牌をつけさせる布達』(明治9)・『就学督責規則』(明治15)・『学齢児童就学規則』(明治20)などを発令し児童の就学を強く勧奨した。学制発布当時,京都府内の児童就学率は46.6%であり,なお貧困その他の理由によって,多数の不就学にならざるを得ない実態があった。そのため京都府は,明治8(1875)年5月に「夜学課業表」を制定し,人生における学問の重要性を説き,昼間働かざるを得ない児童のために夜学奨励の告諭を行なうなど,夜学の設置を督励した。京都での夜学については,記録によると既に明治5(1872)年,明倫小学校に夜学が置かれ(明倫誌),また明治9(1876)年に授産会社の『夜学設立伺』(府県史料・教育・十五巻)などがみられたり,大店での夜学舎の開講も順次行なわれてきた。その他篤志家や地域の願いによって,例えば『夜学義会』(明治16)・『協同夜学』(明治31)・『京都子守学校』(明治40)・『改進夜学校』(明治43)・『尊信夜学会』『京都市立商工夜学校』(明治45),さらに『柳池夜学会』『龍池夜学会』(明治45)などが創設された。

大正3(1914)年に至り,不就学児童救済対策として,京都の公立小学校28校・39学級の『夜間特別教授』が開始された。開設校の分布状況をみると,京都の地場産業等との関連がうかがえる。また,企業に雇用された学齢児童の就学を保障するために,工場主が雇用している児童に適切な教育施設を設けるよう規定した「工場法施行令実施規則」(大正5)が制定・実施された。統計から,大正7(1918)年には小学校の夜学に通学する児童数は2,007人,企業内児童数は計132名に及んでいる。

就学碑

戦時体制により廃止される直前の,昭和15(1940)年度の小学校の夜学の状況として,41校・45学級,児童数938名が記録されている。

ボランティア 市民学芸員の声

「サクラ読本と私」

学校歴史博物館
市民学芸員 吉田　薫

9月のはじめ,来館されたお方が「教科書の部屋」に入るなり「教室の匂いがします」と仰しゃいました。何うと大正12年生まれとのこと。小学校で学んだ教科書への思いは,どなたも一入深いようです。私は昭和10年の入学。教科書の中でも「サイタ,サイタ」で始まる所謂「サクラ読本」全12巻は初めての色着きで懐かしく,表紙の左下がボロボロになるまでよく使いました。教科書を手にすると,担任の先生や級友の顔,そして声までが思い出されます。

正確な考証を経てわかり易く説明を付された常設・企画の展示物は,その前に立つ人それぞれに1世紀以上にわたる京都の学校歴史を無言で語りかけて来ます。小学校低・高学年別に色を分けて説明パンフレットが備えられているのもゆき届いた心づかいです。全国的にもおそらく例を見ない博物館。来館者が帰られるときの「ありがとうございました」のひと言が嬉しい市民学芸員の私です。

「学校歴史博物館と私」

学校歴史博物館
市民学芸員　岩木 一美

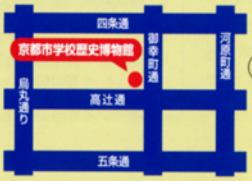
私が京都の博物館とかかわりを持ったのは,京都市女性大学の一期生として卒業論文のテーマが「京都市における博物館と美術館のボランティアについて」の研究でした。

その後,立命館大学に進学して四年間で卒業し,学芸員の資格を得た事は思いがけないよろこびでありました。人生の半ばを過ぎた自分に何が出来るのか考えていた時,「京都市博物館・ふれあいボランティア」の養成講座を受講しました。

現在「学校歴史博物館」の市民学芸員として活動させてもらっていますが,修学旅行生,観光客,地域の人々,小中学生,との心のふれあいを大切にするようにしています。来館者の方から昔の小学校時代の思い出や,人生の奥深い体験がまるでひとつの博物館や図書館の様に感じられる年配の人々のお話を聞かせてもらうことも楽しさの一つです。展示品の解説をしながら,自分も一方で学ばせていただく事の多い日々でして,博物館都市の京都市民として,生涯学習の広がりと日本の教育史に残るこの「学校歴史博物館」に元気で活動出来る事に感謝しております。

京都市学校歴史博物館の案内

■施設利用
- ●入 館 料/大人200円　小人(高校生以下)100円
  (団 体/大人160円　小人80円)※団体は20名以上
- ●京都市内の小・中学生は土・日は無料
- ●開館時間/9:00～17:00(入館は16:30まで)
- ●休 館 日/水曜日(休日の場合は翌日)
  12月28日～1月4日



ひと・まち・ロマン 元気都市・京都

- ●阪急電車/河原町下車　南西へ徒歩5分
- ●地下鉄/烏丸線四条下車　南口改札　東へ徒歩10分
- ●市バス/四条河原町下車　河原町通より西へ二筋目(御幸町通)を南へ徒歩5分

※駐車場はありません